

優秀修士論文概要

サミュエル・ベケットの小説 *Company* における言葉と 主体について

川 島 知 也

本論文はサミュエル・ベケットの小説 *Company* を主な研究対象とする。*Company* のテキストは59の断章によって構成されている。従来の研究の多くが、その最後の断章にあたる“Alone.”をテキストの言葉を包摂する一者を指すものと解し、この小説の言葉をその内的な言説として捉えてきた。そのため、この小説は主体の扱いに関してベケットの作品の中でも特異な位置にありながら、内省的な作品として一元的に読まれてきたといえる。また一方で、そうした解釈をとっていない研究においては、この小説における言葉と主体の関係が明らかにされておらず、このテキストにおける特異な主体あるいは言葉の境位が十分に論じられているとはいえない。そこで本研究は、一者の内在性に閉じることのないこの小説の言葉の在り方を、主体との関係において明らかにすることを目指す。

第一章では、主体の同一性を解体する *Company* の言葉の運動をデカルト的な論理との差異といった観点から考察した。ベケットの初期の詩作である *Whoroscope* の中で描かれていたデカルト的論理は、*Company* において大きく転換される。*Whoroscope* では、もし私が私の創造者であるならば、自分は完全であるはずだが、そうではないため、超越的な神が存在しなければならない、とするデカルトの論理がパロディによって描かれていた。それに対して *Company* では、そうしたデカルトの論理が終わりのない脱中心的な循環へと転じられている。*Company* における創造者は、二人称で語りかける a voice と、語りかけられる one in the dark について、三人称で語る語りにあたる。いわば三人称による語りは a voice / one in the dark に対してメタ的な位置にある。しかしテキストが進むにつれて、そうした語り自体が創造されたものであることが明らかになる。*Company* において、創造者は自らの創造者であるが、ゆえに自らもまた創造されたものであり、超越的な創造者ではありえない。そうした創造者＝被造物（語るもの＝語られるもの）の循環が、創造するもの（語るもの）としての主体を宙づりにする。

また *Company* の言葉はデカルト的な疑念を徹底する。デカルトにおいて疑念が自己の實在の根拠となるのは、思考する主体としての〈私〉を前提とする限りでのことであった。加えて、デカルトは存在の起源として、絶対的に自律的な創造者としての神を想定していた。しかし、語る－創造する主体の實在を前提としない *Company* のテキストにおいて、存在の起源を問うデカルト的疑念は「無限遡及」へと開かれている。そのため、自らの起源を問う語りの自己言及は、中心に行き着くことなく空回りし続け、語る主体を宙づりにする。言いかえれば、自身の起源を問う「誰」の問いの徹底が、その中心としての同一性の不在を明るみに出すのである。そうした脱中心的な運動において、*Company* の言葉は、メタ的な準拠であるはずの語り、すなわち創造者の同一性を解体する。そこに言葉－世界を包摂する起源としての主体は存在しない。*Company* のテキストは自らの運動において、言葉を一なる世界あるいは主体の〈外〉へと開くのである。

第二章では、*Company* のテキストに書きこまれている書くこと／読むことの在り方について検討した。

この小説は三人称による語りと二人称による語りの二つの語りによって構成されており、双方の語りはそれぞれの断章によって隔てられている。二人称で聞き手に対して過去を吹き込もうとする a voice だけでなく、それを俯瞰する三人称による語りもまた、a voice の聞き手、すなわち one in the dark が〈私〉として物語を担い、自らの言葉を語るようになることを望んでいる。言いかえれば、主体としての〈私〉を生起させることで、テキストの言葉を中心化、あるいは物語化することを望んでいる。語るものの同一性、すなわち言葉の起源があつてはじめて、物語は物語として機能する。それぞれの断章を構成する双方の語りは、小説形式に内在する欲望として、テキストの言葉を物語化しようとするのである。第一章でみた主体を宙ぐりにする運動は、こうした言葉を中心化する運動との対立においてテキストを構成する。そして、この相反する運動のただなかに、書き手／読み手の境位が書きこまれている。

まず書くことに関わる *Company* の際立った特徴として、書き手、すなわちベケット自身の過去に関する自伝的描写の挿入が挙げられる。一見、書き手の自伝的描写はテキストの言葉を書き手の言葉として中心化するように思われる。しかし、ベケットは二人称による断章において自伝的な描写を挿入しつつ、a voice と one in the dark の関係を通して、その起源を消失させる。a voice によって you の物語として語られるそれらの描写は、いかなる〈私〉あるいは主体においても担い取られないことがない。もちろん、それは二人称で語る a voice の物語でもありえない。ベケットは自らの記憶あるいは物語を導入しつつ宙ぐりにすることによって、書き手としての起源を途絶させる。いわば *Company* のテキストには、書く主体の途絶それ自体が書きこまれているのである。

一方で、読み手は二人称 you を介して、one in the dark と同様の境位——すなわち、脱主体的かつ不特定な聞き手の境位——に置かれる。you によって縁どられた〈私〉を持たない対象である one in the dark は、you における物語を〈私〉として想像することを強いられる。そうした状態は、読み手がテキストに自らを委ねる際の脱主体的な体験に重なる。加えて、二人称 you の宛て先が特定の one in the dark と一致することは最後までない。そうした不特定性もまた、読み手的な在り方であるといえる。テキストに向かう読み手は二人称 you によって指し示されるが、その二人称 you が自らを指し示しているという保証はどこにもない。いわば a voice と one in the dark の関係のなかに、テキストに向かう読み手の境位そのものが書きこまれている。そして最終的に二人称 you における物語が one in the dark あるいは読み手によって担い取られることはない。二人称で語られる物語が中心化の作用をもたらす一方で、ここでもまた a voice と one in the dark の置かれた関係が絶えずその言葉の起源を先送りにし続けるのである。

テキストの言葉を中心化しようとする物語的欲望は、つねに他方の脱中心化する運動によって宙ぐりにされる。そうした対立する運動において、書き手、読み手の主体の途絶が書きこまれている。言いかえれば、*Company* のテキストは、書き手の言葉でもなければ読み手の言葉でもないものとして、テキストそれ自体によって指し示されている。そのとき、*Company* の言葉はテキスト内部の主体のものでも、テキスト外部の主体のものでもありえない。すなわち、それはいかなる起源も持たない。主体なきテキストとしての *Company* の言葉は、主／客、あるいは虚／実といった対立が生成する以前の肯定＝断言として、他なるものとして存在するのである。

第三章では、あらゆる主体の〈外〉にとどまる *Company* の言葉の存在論的な境位について論じた。中心を持たない *Company* のテキストは、自らによって展開された言葉の網の目として存在する。またそのテキストは言葉を主体の〈外〉へと開く運動それ自体として形成されている。最後の断章である

“Alone.” がテキストについて何かを指し示すことができるとすれば、それは中心を欠いた言葉の布置としての一つの空間であるだろう。そのとき“Alone.”は多についていわれる一となる。しかし、指し示されるその空間はそれ自体において閉じることがなく、一なるものの〈外〉へと開かれている。そのため、“Alone.”が指し示すのは、自らの運動において開かれたテキストそれ自体となる。加えて、その言葉は単に物質的な地平にあるのではない。*Company* の言葉は、主体を宙づりにする限りにおいて主体の〈外〉にとどまるのであり、そうした主体との関係において存在論的な地平にある。その言葉は、主体や意識といった有為なものに回収されない存在の肯定＝断言として、あらゆる〈私〉のあいだにとどまり続ける。

また同時に、“Alone.”は一人の主体としてテキストを離れることになる読み手の単独性を指し示す。すなわち、テキストの運動において脱主体的な他性へと開かれる読み手は、テキストを離れると同時に、自らが“Alone.”であることを告げられる。そこで読み手は一人の主体として生起することになる。しかし *Company* のテキストは、主体が単独である以前の境位、すなわち諸々の他性が共にある境位にとどまり続ける。*Company* の言葉は、主体との関係においてそれ自体存在論的な地平にあり、そうした地平に開かれてあることによって、存在者が主体である以前に他性として共にある境位を指し示す。こうした意味において、*Company* のテキストは、一者の内在性にとどまるものでも、単なるナンセンスにとどまるものでもない。それはむしろ、主体や神といった一なるものに閉じることなくニヒリズムを乗り越える、存在論的な試みであるといえるだろう。